



医師会だより

Vol.8
2008.1.17

発行/大村市医師会
大村市協和町779番地
TEL 0957-54-0151
FAX 0957-54-3646
印刷：(株)つじ印刷

市民のみなさまへ

大村市医師会 会長 長崎省吾

新年明けましておめでとうございませう。皆様にはつつがなく新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、日ごろより当医師会の活動に対し、ご理解とご協力をいただいております。とくに心より感謝申し上げます。

昨年医師不足と勤務医の過重労働問題が話題となりました。当地でも数年前からすでに兆候はあり、昨年は市立病院の小児科が長崎医療センターへと集約され休診になりました。このことと一番心配されました小児科の時間外診療については、大村市のご理解と医師会会員の協力により、昨年4月から『大村市こども夜間初期診療センター』を開

設し対応しております。初期診療のみを行うため、皆様にご心配とご不便をおかけしているかとは思いますが、医療センターとの連携も良好に行われ、今までと変わらず、皆様の生活に支障をきたすことなく経過しているものと考えております。

現在、我が国の財政は非常に厳しく、その一つの原因が、高齢化にともなう医療費の高騰と言

われています。私達は、現在の国民医療費が高いとは思っておりません。むしろ、国民の健康を守るには低すぎるのではないかと考えております。とは言っても、限られた財源の中で無駄を省き、財源を有効に使うことに反対するわけではございません。そして、その無駄を省くためにできる事の中で最も大切なのは病

院の役割分担をきちんとすることではないかと考えております。皆様は、軽い症状で大病院を受診しておられますか？確かに、軽い症状が軽い病気とは言えませんが、様々な病気に対応が可能な大病院は安心です。しかし、軽い病気の患者さんで大病院があふれてしまうと、本当に

重い病気の患者さんの診療に支障をきたしかねません。原則として初期診療ではまず地域の開業医をご利用いただき、詳しい検査や治療が必要であれば紹介によって大病院を受診し、病院での検査、治療が終了した後は再び地域の開業医で治療や経過観察を行う。こういった医療の流れを、一次・二次・三次医療(医

療の役割分担)といいますが、これにより医療の無駄を少なくし、より効率的に行うことが可能になります。そして、役割分担に大切な医療の連携については、ITを使った病診連携ネットワーク『あじさいネット』や在宅医療のための『ドクターネット』など

全国に先駆けたシステムも含めて体制としては非常に整っております。皆様にはこの医療の役割分担にご理解をいただきたいとお願ひ申し上げます。

また、4月からは『後期高齢者保険制度』や『特定健康診断』などの新しい制度が始まります。予防注射や学校保健活動などに加え、今まで以上に、大村市等関係機関と協力して地域保健と医療制度の充実を図っていくつもりです。

本年も、我々医師会は今後も国民の視点に立って地域の医療・保険・福祉の向上発展を願って活動を展開し、本『医師会だより』や『大村市医師会市民公開講座』などを通じ、私達の活動をお伝えできればと思っております。



健康コラム

vol.8

子供に多い皮膚病について

大村市医師会 会員 前田 啓介

子供の皮膚は大人に比べ、皮膚が薄く汗をかきやすいという特徴があります。また、皮脂量や保湿度が少なく、皮膚が乾燥しやすいという反面もあります。そのため、皮膚のバリア機能が低下して、皮膚炎や感染症がおこりやすくなっています。以下に子供に多い皮膚病について簡単に説明します。

1. 湿疹・皮膚炎群

①乳児脂漏性皮膚炎

生後2～12週までの赤ちゃんに発生しやすく、主に顔面、頭、胸などに皮膚の赤み、ぶつぶつ、黄色いかさぶたが出現します。症状がひどい時にはぬり薬を使います。

②おむつ皮膚炎

便や尿の刺激でおきる皮膚炎ですが、かび(カンジダ)がついていることがあります。下痢などの時は、おむつ交換のたびにぬるま湯で洗ってあげることが大切です。

③アトピー性皮膚炎

強いかゆみを伴う皮膚炎が慢性、再発性に生じる皮膚病です。生後1年までは、主に顔や頭に皮膚の赤みが出現し、ただれなどを伴います。幼少児期になると乾燥性の発疹が広がってきます。治療は、スキンケア、環境整備、アレルギー原因物質の除去、正しい外用剤の使用が必要で、根気よく治療することが大切です。

④接触皮膚炎(かぶれ)

植物(ハゼ、ウルシ、ギンナン、マンゴーなど)、金属、ゴムなどが皮膚に触れることでおきるかゆみの強いアレルギー性の皮膚炎です。

2. じんましん

かゆみのある赤い皮膚のもりあがり、消えたり出たりします。原因不明が多いのですが、小児ではかぜやストレスなどがきっかけになることがあります。治療はのみ薬をしばらく続ける必要があります。

3. 皮膚の感染症

①とびひ(伝染性膿痂疹)

主に黄色ブドウ球菌などの細菌が皮膚に感染しておきる病気です。虫刺されやあせもや湿疹などを掻いて、小さな傷ができていたり、転んでできた傷があると、そこから細菌が入ります。症状は、皮膚が赤くなり、水ぶくれやジュクジュクした状態(びらん)がおきて、かさぶた(痂皮)をのせるようになります。治療は、細菌を殺す抗生物質の内服と外用が必要です。

②水いぼ(伝染性軟属腫)

伝染性軟属腫ウイルスが皮膚に感染しておきる病気です。自覚症のない(若干かゆいこともある)皮膚と同色でつやつやし、中央がくぼんだ小さないぼが皮膚にできます。ピンセットでつまみ取るのが、一番早く治る治療法です。

③いぼ(尋常性疣贅)

ヒト乳頭腫ウイルスが皮膚に感染しておきる病気です。手足に多く、表面がざらざらした硬いいぼができ、うおのめやたことよく間違われます。治療は液体窒素でいぼを凍らせる方法や漢方薬を飲む方法があります。

④その他

ウイルスでおきる発疹性の病気には、はしか(麻疹)、3日はしか(風疹)、リンゴ病(伝染性紅斑)、水ぼうそう(水痘)、手足口病などがあります。

4. 虫による皮膚病

蚊、ノミ、ダニ、ブヨ、蜂などに刺されると赤い斑点やぶつぶつ、水ぶくれなどでできます。その反応は個人によってかなり差があります。毛虫は、春と秋に幼虫が発生し、その毒針毛が皮膚に刺さり、ひどい皮膚炎をおこします。最近、頭ジラミは学校やプールなどで全国的に集団感染がみられます。殺虫剤のシャンプーがありますが、卵には効かないため、数回の使用が必要です。虫刺されでは、時にショック(蜂など)や細菌の2次感染(とびひなど)などがおきます。

その他にも、あせも(汗疹)、あざやほくろ(母斑)、水虫やたむし(白癬)、おでき(癰)、にきび(痤瘡)などがあります。子供の皮膚病は、成人の皮膚病とはかなり異なっていますので注意が必要です。